

アクティブ・ラーニングの推進



理事(教育担当)・副学長
大学教育センター長

國見 裕久

最近、「アクティブ・ラーニング」の言葉を耳にする機会が多くなった。平成24年8月28日に提示された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（いわゆる質的転換答申）において、初めて言及された言葉である。質的転換答申は、学生の主体的・能動的な学修が不十分という実態を踏まえ、真の「学士力」育むためには、ディスカッションやディベートといった双方向の授業やインターンシップ等の教室外学修プログラムによる主体的・能動的学修（アクティブ・ラーニング）を促す学士課程教育の質的転換の必要性が強調されている。この考えは、その後の「教育再生実行会議第七次提言」（平成27年5月14日）にも引き継がれている。

「アクティブ・ラーニング」は、確かに最近になって出現した言葉であるが、その教育的精神は、過去の中央教育審議会答申においても提示されている。たとえば、平成10年10月26日に提示された中央教育審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について ―競争的環境の中で個性が輝く大学―」においては、基本理念の一つとして「課題探求能力の育成を目指した教育研究の質の向上」が示されており、この内容は主体的学びの重要性を提示するもので、現在の「アクティブ・ラーニング」そのものといえる。

主体的な学びを通じた課題探求能力の育成の重要性については、本学においてもかなり早い時期から認識されており、平成11年6月に提出された「カリキュラム改革の意義と新カリキュラムの概要」（教育体制検討委員会）において具体的方策が提示された。理工系大学において「アクティブ・ラーニング」といえば、卒業論文研究が代表的なものであるが、卒業論文研究に至る過程において、課題探求能力の育成に向けた授業科目をどのように配置するかが重要となる。本学では本報告を基に、課題探求能力の育成に向けた授業科目として新たに教養科目として「基礎ゼミ」を平成12年度から導入している。基礎ゼミの開講形態は農学部と工学部で異なるが、農学部では、その設置理念に基づき学部が責任をもつ科目として開講されている。平成16年度までは、毎年、実施報告書が発行されているが、それを見ると学生が基礎ゼミの課題に積極的に取り組んだ姿勢が感じ取れる。

学部教育における「アクティブ・ラーニング」科目としては、残念ながら基礎ゼミしか開講されていないが、今後は学部4年間を通じた「アクティブ・ラーニング」科目の配置と全ての科目においてアクティブ・ラーニングが目指す学習形態を導入することが望まれる。

目 次

- 巻頭言 國見 裕久：理事（教育担当）・副学長／大学教育センター長

- 特集 「農工大におけるアクティブ・ラーニングの取り組み」

- <報告>
 - ・「自由テーマ設定型の実験種目の設定とその教育効果」
松崎 清司, 畠山 温, 三沢 和彦, 太田 寛人, 秋葉 圭一郎（工学部物理システム工学） 1

 - ・「自然科学におけるアクティブラーニング型授業」
佐藤 友久（大学教育センター） 7

- <研究論文>
 - ・「「高大連携教室」におけるアクティブ・ラーニングの効果」
藤井 恒人, 佐藤 友久, 尾崎 宏和, 國見 裕久（大学教育センター） 13

 - ・「リーダーに必須の英語コミュニケーション力醸成カリキュラムの構築
一言語教育とアクティブ・ラーニング」
村山 眞理（大学教育センター） 21

- 報告
 - ・「新入生アンケート（大学・大学院）の3か年分析」
藤井 恒人（大学教育センター） 29

 - ・「電気電子工学科における学習支援の取り組み」
蓮見 真彦（工学部電気電子工学科） 37

 - ・「理系大学の教職課程における“英語で授業”の試み」
守 一雄（工学部教職専任教員） 43

 - ・「サステナビリティ教育のための中国北西部におけるフィールド研修」
梅村 尚子（イノベーション推進機構） 51

○ 研究論文

- ・「「高大連携教室」開催の時期と高校生の学習進捗・発達段階の関係」
尾崎 宏和, 藤井 恒人, 佐藤 友久, 國見 裕久 (大学教育センター)・ 57
- ・「科学技術の「不確実性」に対する創造的思考構築プログラムの設計」
岩田 陽子 (大学教育センター) 65

○ センター活動報告.....75

○ センター専任教員活動報告.....85

○ センター運営委員会議題.....93

○ 編集方針・投稿規程・教育データの取り扱いに関する指針.....99